

## 精神発達遅滞幼児の治療教育過程の研究（3）

### —保育者の動きの一側面（Ⅲ）—

研究第8部 松 沢 孝 博

#### はじめに

保育の中でよく体験する現象<sup>注</sup>がある。そこでの子供の気持ちを疑いもなく推し量ったり、その現象を意味付けたりして一般的なことにしてしまう。そしてそれらをそのまま持続させて子供と接していることがある。それがしばらくたって振り返ってみると必ずしもはじめの思い通りではないことがある。

今回特に、高い所に登るといふ現象に対する思いが、Hという子供と接し、当初の思いが一般的ではなく、Hにとって独自のことであったことを感じる。そこで、Hにとって高い所へ登るとはどのようなことであったかを記録を追いながら述べてみる。

#### 今まで高い所に登るといふ

現象に抱いていた私の思い

#### 事例A

Mは平地を歩くことは出来ても階段は手すりを使っても一人で登ることは全く出来ない。私がMの手をとり、一段一段引っぱりような格好で登っていく。一番上の踊り場でMは自ら手を叩く。そして笑顔を見せる。その後は気嫌がよい時には自ら私の手を引いて登ったりし、次第に一人で手すりを持ちながら登ようになる。私が後からついていくと登りきった一番上の踊り場で体じゅうでうれしそうにする。そして、上にいる時は気嫌、大変よい。

#### 事例B

Tは比較的言葉の出る子供であり、よく「先生」といって声をかけることがある。すべり台に通じる一番上の踊り場（二階位の高さ）から下にいる私達に向かって、地上では発しないような大きな声と表情をして先生と呼びかける。

#### 事例C

Nは地上では大人に対してそれ程呼びかけることが少なかったが、やはり最上部の踊り場から「オーイ」といって呼びかける。それからは地上でも「先生」といって呼びかけることが多くなる。

#### 事例D

ジャングルジムに乗ったことのなかったと思われたTがその上から「オーイ」と私の方に呼びかけている、振り向くと体全体から振り絞るような声で呼びかけている。

地上でかわす不十分ながらのコミュニケーションでは見られない相手をはっきり意識しての呼びかけや、その子供が体全体で示す力強さをそこに見ることができる。高い所に登るといふ現象を考えると、世界が変わることによる驚きや喜びかもしれない<sup>1)</sup>。また高い所への登り、あるいは上昇志向は成長への発展が期待される<sup>2)</sup>。とにかく、同じ地平上にいる時の表情や動きとは違う活き活きした様子を見ることが多い。こういうことから、子供が高い所へ登るのは子供の成長の兆しや元気さの裏付けとして発展的にとらえやすかった。

#### 高い所に登ることの多かったHの事例

H：男子 5才、父親の仕事の関係で1975年7月東京に転居、1975年9月入園、週二日通園、1976年3月卒園

#### 記録1より

入園前の面接時、入室してからすぐ大鼓橋ののっている。下から大人が呼びかけても見向きもしない。しかし大人がそばにいることは嫌がる様子は見受けられない。それ以外はウロウロしている。入園してからは、少し動く部屋から、また園庭から出ようとする。何とか宥め

て楽しんでもらいたく色々な手を出す。抱いて気嫌をとったり、トランポリンにのせたり。しかし多くは手を出すと無表情のまま下へと立ち去っていく。たまたま他の子供に気をとられている時、突然の泣き声がある。一人で泣いていて、人を求める様子もない。

#### 記録2より

多くは一番のりで入室することが多いので一緒に動き出すことが多い。今日もまずトランポリンに乗る。トランポリンの外に私を立たせて私の手を取りながら跳ぶ。私の顔をみて手を出し取るのではなく、手だけ私の方に出し、顔はどこか違うところを見ている。とにかく跳びつづける。ある時は私の手を引っぱり、トランポリンの中に引き入れ一緒に跳ぶ。そこでも手をとりながら跳んでいるのだが、私が歌を歌ったりふざけたりしていても何か一方通行の感じが強い。時々一人で笑ってはいるが、ある時間がくると全く余音を残さずH一人でトランポリンを降り園庭に出る。私もあとを追う。Hは一直線に大鼓橋の上に乗る。上に一緒にのり語りかけても、下から呼びかけても反応はない。また一人で降りジャングルジムに乗る。またしても私はHの後を追うが途中で他の子供がきて私を引っぱる。すると私はつい関係のつき易い子供と遊び出してしまふ。しばらくしてHの方を見るがジャングルジムの上で、どこを見てもなしに顔を斜に構えて眺めている。私は、Hはトランポリンや太鼓橋、ジャングルジムが好きなのか、あるいは成長過程の一つの現象かと考えながら他の子供と遊びつづける。突然Hの泣き声がある、<sup>\*</sup>Hおいで。という偶然か駆け寄ってくる。他の子供にやられた様子やどこかぶついたり転んだ様子もない。医学的にチェックする必要はないのかも思うし、一人で寂しかったのかも思う。今までも突然泣き出ししたりする時はほとんど一人でいることが多いし、今日特に彼の寂しさのようなものを感じたので、やはり徹底的にHについてまわることになろうと考える。しかしその後も意図的にHの傍にいたり、オモチャをさしだしたり、体にさわったりしても瞬間的にHの表情が私に向けられたとしてもすぐその場を離れていく。

どうしていいか判らずうちの私の変化

——視線を追う——

#### 記録3より

今日は少し遅く入室、しかし他の子供が子供同士で遊んでいたりで、まだ大人の手も余っていたのでHと一緒に遊びはじめる。今日は出来るだけHの視線を追ってみようと思う。Hと、どこかつながりがとれないで困惑を経験している私にとって、それでは、Hは何に興味をもっ

ているのか知りたくなった。そして、Hが視線を向けるものすべて興味の対象とは思わないものの、視線を向ける顔度が高ければ興味のある、また気になる物とか人ということになるであろうし、そこからつながりが発展していくのではないかと考えられたからである。

今日も入室からトランポリンをする、表情はよい。しかし、またしても余音を残さず一人で園庭にでる。Hが要求してこない限り場所を変えず砂場にすわったままHの視線を追う。無目的にという感じで少し動きまわり太鼓橋にのる、のっている様子は足と手でぶらさがるとき以外は顔を斜に構え横座りの様な格好で何か見ている。ところが、意外にチラチラと私の方を見ているのに気付く。気をよくして私は、H自身も注目してもらいたいのだろうと思ったこともあり積極的にHの視線を追うことにした。するとHが一つ動きを変えるごとに視線が合う。今まで、あるいはこんなに視線を向けていてくれたかもしれないと思うと、ただHとの距離が少し離れただけで他の関係のつきやすい子供に気をとられてしまうことの多かったことを申し訳けなく思う。Hは比較的近くにいる子供にも目を向けている。トランポリンに一人で戻る。しばらく一人で跳びはねたのち、横になりながら私の方を見る、私が笑いかけると、Hも薄笑いを見せる、偶然かもしれないし、言葉も介さず直接的接触があったわけでもないが何か行ききがあったという感じ。兎に角地上に自ら足をおろして道具を使って遊んだり、また他の大人や子供と関係をもって動くということは少ない。あったとしても僅かで、足と手を大人に持ってもらい体を揺らせてとせがむぐらいで、それもH自身は足や手は絶対に地につけない。それ以外、砂場に駆け込んでみたり、ウロウロ歩きまわる程度。

#### ○トランポリン

一人で跳び続けたり何げなしに私の手をとりながら跳んだり、一緒に跳んだり。遊びの中では一番表情に変化があり活気がある。

#### ○太鼓橋

横座りのような格好をしたり、ぶら下ったりしている。太鼓橋の上にいる時は必ず顔を斜に構え何か見ている。私は一緒にその上にいると安全のことばかり考えてしまう。

#### ○ジャングルジム

一番上の部分に足をかけ坐る。どこということなしに見ている。見学者がきて下から手を出す場所を移動する、勿論呼んでも振り向きも視線も合わせない、私が一緒に上にすわると時にHが私の膝の上に坐るが、私との気持ちのつながりから坐るといふより確実に坐りやす

いから坐るといふ感じ。

○非常階段を兼ねたすべり台

上の踊り場でウロウロしている、時々遠くを見ている。  
すべり台は滑らず階段を降りてくる。

視線が合うことが多くなってきたものの、当初の思い  
に対する期待や手掛りをつかめないままでした。

ともかくも視線を追いながら

記録4より

今日やはり視線を追う、よく視線が合うが、そこから  
すぐ僅かでも直接的、言語的つながりが生ずるわけでは  
ない。私の手をとらずにトランポリンにのる。私のいる  
方とは反対向きになって跳ぶ。私はすぐ傍にある黒板に  
Hが以前本をめくっていた時にそこに書かれていた動物  
を書く。すると黒板の上にている欄に手をかけ、足を  
私の肩に置く。仲よく肩に手をかけられたと同じ感じが  
する。食事は相変らず無欲。席につこうともせず、弁当  
を見せても興味を示さない、私はトランポリンの上にいる  
にオカズをホークでつき、Hの口に運ぶ。今までは私  
が食べさせようとする手で払いのけていたが、今日は  
笑っている。食べることを勧めると口を開く。少しだけ  
口に入れる。それ以上は食べないがまた笑っている。何  
か私はHに見透されている感じがしないでもない。

記録5より

園庭の隅に横になっている。私は手前5～6m離れた  
所からHの視線を追う。『Hちゃん、』と呼びかけると、  
笑顔をごちらに見せる。

トランポリンは相変らずだが、今日は太鼓橋に1回だ  
けのる。

記録6より

視線が合うことが多くなると同じ地平上で動くことが  
多くなり、太鼓橋やジャングルジム、すべり台にはのる  
ことが少なくなってきた感じがする。今日トランポリン  
が多い、高い所へは全くのらない。

記録7より

トランポリンに引っぱられ一緒に跳ぶ。ひとしきり跳  
ぶと、私の手を少しとり部屋をでる。すぐ一人で太鼓橋  
にのる。そして仁王立ちになり笑顔を見せて私の方を  
見る。下から私が手をあげ迎えると抱かれながら降り  
る。そして一人で部屋に戻りトランポリンをしている。  
私は止まって太鼓橋の前からHがトランポリンを跳んで  
いるのを見ている。Hは私の方を何回か見ながら跳び続  
けている。しばらく跳んだ後、降りて私の傍に戻って  
くる。何をしようというわけではなさそうなので久し振り

にジャングルジムに誘う。Hは一番上に坐り下にいる私  
や他の子供の動きをみている。私は園庭の隅や他の子供  
の動きをみている。私は園庭の隅に場所を移し坐ってH  
を見ている。Hは少しの間ジャングルジムの上に乗って  
いたが、すぐ降りて、ウロウロしながら私の坐っている  
方に来る。そして傍に近づきながら私の顔をスーと擦  
り離れ、またスーと寄って頭を叩き離れ、またスーと寄  
って肩を擦る。そのようなことが度続く。そして私のそ  
ばに来て坐り、砂を握って落とす。私も砂をとりHの手  
の上にかける。Hは喜び、私の手をとり砂を取るように  
指示する。私は再びHの手の上に砂をかける、するとH  
は喜ぶ。

記録8より

今日でHともお別れ！もう学校である。やはり今日  
もトランポリンで始まる。大変気嫌がいい。僅かな時間  
のうちにそこを降り園庭にでる、Hは園庭の隅に坐る、  
私も横に坐る。Hが私の手に砂をかける。私はHのすぐ  
前に手を出す。Hは私の手に再び砂をかける。それを私  
は落とし再びHの前に手を出す。するとHは再び砂を私  
の手にかける、そんなやりとりが続く。そうしているう  
ちに私の頭に手をのせて立ちその場を離れていく、しか  
しすぐ振り向き私の方を見る。そして私の方へ戻ってき  
て私の体を軽く擦るようにしてまた離れる。そのよう  
なことが三回続く。

## 結 び

何回か途中休んだこともあり本当に短い時間のつき合  
いであった。遅く入園し、年が明ければ就学ということ  
で、出来るだけ早く関係だけでもつきたいと焦っていた  
私である。それは高い所へ登るといふことに対し発展的  
に考えていたため、今何とかすればより早くHが変化し  
てくれるであろうと思い策を考へた。しかし策を考へず  
ば考へる程つながりが希薄になるように感じられた。  
技巧的に視線を向けることの必要性や、視線を向けるこ  
との逆効果も考えられるようだが<sup>3)</sup>、その時は居直った  
形で、視線を向けることしか思いは浮ばず注仕方なくと  
いう形で注目し続けたのである<sup>4)</sup>。

そこで、視線が合うようになって、同じ地平上で動く  
ことが多くなり、また一緒に動く機会が増してきたHで  
あるが、Hにとって高い所は、新しく入ってきた場所や  
人に慣れない時における唯一の逃げ場ではなかったのだ  
はないだろうか。人間は逆境に合うと高みへ訴える<sup>5)</sup>。  
訴えることの出来ないHは自ら高い所へ向かったのでは  
ないか。ある子供は保育者が家として逃げ所になった

り<sup>5)</sup>隠れ家になったりするが、ある子供にとっては、ある場所が避け所となることが考えられる<sup>3), 4)</sup>。例えば、ある子供は母親から離れない、ある子供は部屋の隅にとどまっている。ある子供は保育者にくっついたままでいる。みなその子供にとって逃げ場なのであろう。その逃げ場であり避け所である所に、またそういう時期を過ごしている時に無理に入り込んだときにHとの関係がよくなるはずはなかったのであろう。家としての保育者の動きを徹底させる必要があったのかも知れない<sup>6)</sup>。短い期間ただけに配慮を欠いたことが悔やまれる。

(注) 保育者は保育中の現象を観察するのではなくそれを体験しているのである。

参考文献

- 1) 草森 紳一： 子供の場所 1975. 晶文社
- 2) 佐野 恵子： 遊びの現象学的考察—上昇と下降— 1974 第27回保育学会大会論文集
- 3) N・ティンバーゲン夫妻 田口恒夫訳： 自閉症 文明社会への動物行動学的アプローチ 1976. 新書館
- 4) 霜山 徳爾： 人間の限界 1975. 岩波新書
- 5) 松沢 孝博： 保育者の動きの側面(I) 1974. 日本総合愛育研究所紀要
- 6) D・B・ハリス 津守真著： 児童発達教育学 1970. 光生館